■研究十二月往来〈69〉■

禪竹時代の能〈善知鳥〉

三宅晶子

〈善知鳥〉は、殺生の罪を犯して地獄に堕ちた猟師の苦患を見せることを眼目とする、砕動風鬼の夢幻能である。しかし夢幻能の定型からは大きく外れている。前シテとワキ、ツレとワキ、後シテとツレ・子方等の関係は現在能のそれと同様で、物語は現実味のある深刻な展開をする。つまり夢幻能的なシテの処理をした、現在能と言ってもよい。

世阿弥は、心は人、形は鬼で、細かに働く砕動風鬼の能（以下砕動能と略す）を確立したが、〈善知鳥〉と設定の近い世阿弥の作品として〈求塚・舟橋・鵜飼〉等と比較して、〈善知鳥〉の特色を明らかにしたい。世阿弥の砕動能は、和歌説話や名所の風情を取り入れて幽玄性を強調し、歌舞を見せ場の中心にするように配慮されている。例えば〈求塚〉では、生田の森の若菜摘みの労働歌が置かれ、〈舟橋〉は、佐野という名所の風情と、万葉集の「東路の佐野の舟橋取り放し」の歌を主要モチーフとして、前場を構成している。〈鵜飼〉では、前シテ登場の段や前場末部等、鵜舟の篝火と闇とのコントラストを巧みに用いて、視覚的な美を強調した場面を作っている。後場は、〈求塚〉が地獄の苦患を見せることを目的としているように、本来砕動能は、地獄の責め苦の仕方話しが眼目とされる能である。〈舟橋〉は、先に引用した歌を再び用いて、それを中心に本説の再現がなされ、佐野の川辺の叙景を地獄の様子に重ねる工夫により、やはり死後の苦患を見せることを主眼とする。〈鵜飼〉では、禁制の殺生をして殺された鵜使いを責める地獄の鬼が後に登場し、法華経の功徳によって鵜使いを極楽へ送る。鵜使いの演じる業力の鵜の仕方話しが眼目の能で、それに鬼神を登場させて祝言性を加味し、砕動能の定型に変化をつけていると言える。いづれにしろ、世阿弥の砕動能の主目的は、地獄の苦患を見せることにあり、しかも幽玄能とするために、名所の風情や和歌説話を利用した見せ場を作ることにある。一方シテの演じる苦しみは専ら肉体的なそれであり、心を問題にすることはない。

ところが〈善知鳥〉は、そのような世阿弥の方法とは別の所に、作者の意図があるようである。後場は、猟師が生前に主に殺したウトウ・ヤスカタが、地獄で化鳥と化して身を責めることを演じるが、これは単なる地獄の苦患ではなく、「なにしに殺しけん、わが子のいとほしいごとくにこそ、鳥獣も思ふらめ…」（7段〈掛ケ合〉）とあるように、人の親である自分が、鳥ではあっても同じ親子を苦しませるような殺生を平気でやってしまったと考える、精神的苦悩が語られるのである。前場が夢幻能の類型に従った、名所の風情を取り込んだ本説紹介の場とされず、立山禅定するワキへ、妻子に回向するよう言伝をたのむ形とするのは、妻子との結びつきを強調する意図もあろう。後場における、7段のシテ・ツレ・子方の応対の場面で、互いに姿を見ていながら、声をかけたり手を触れたりできない状態が、〈掛ケ合〉によって描かれるのも、親子の恩愛の絆の強さと、それを無理に断ち切られた悲しみを表現している。故に、化鳥に責められる一連の見せ場（特殊なカケリ・ノリ地・中ノリ地）も、地獄の苦しみを描きながら、実は残酷な殺生を数限りなく行ったことへの後悔から来る心の苦しみをも表

現しえているのである。世阿弥が〝地獄の恐しさ〟こそに関心があり、それをおもしろく見せるために、和歌説話や名所の風情を利用したのに対し、〈善知鳥〉では、その苦しみは心の苦しみでもあるという描き方がなされているのである。それを表現するために夢幻能の変形化も行われているのであろう。そして、舞台とされる立山や外の浜という土地柄が、世阿弥風の華やかで風雅な名所の風情とは別種の恐しい雰囲気を醸し出しており、作品の残酷なテーマを生かすイメージ作りに効果的に利用されているのである。

ところで〈善知鳥〉の初出は、現在の所寛正六年（一四六五）二月二十八日の将軍院参の際の観世演能（親元日記）で、音阿弥・禅竹の活躍する時代である。音阿弥の能作活動は伝えられていないから、この時代の能作は禅竹中心に動いていたと考えられるが、この時代には〈俊寛・景清〉等、世阿弥時代には考えられなかったような、深刻で、人間の苦悩をテーマとした名作が、作られた時代である。〈善知鳥〉も〈鵜飼・阿漕〉等殺生の罪で地獄に堕ちた幽霊を描く砕動能の系列でのみ捉えるのではなく、人間の内面に焦点を当てた曲が多く作られた禅竹時代の能の一つとして、捉えなおしてみる必要があろう。そうすることによって逆に、世阿弥時代の能が、実は見せ場中心に作られているという特質も浮かび上がって来るのである。

古い時代には、まず見せ場があって、筋書はそれを導くための説明でしかなく、両者はうまく一体化できていない場合が多かったと考えられる。世阿弥は、辻褄の合った無理のない筋書展開の中に、おもしろい見せ場を置く工夫をしているのである。しかし筋書は固定的・類型的で、筋書にはそれほど世阿弥の興味はなく、又必ず大団円で終結することが示すように、見せ場の内容も極端に深刻なものではない。見ておもしろいものや、本説の巧みな紹介が主目的であったと言える。故に筋書は、如何に自然にその見せ場を置くかの配慮さえなされていればよかったとも言えよう。ところが禅竹時代の能は、見せ場で表現される内容が、そのまま筋立となって積み重ねられていくような構造となっており、定型化されずに、明確なテーマ意識のもとにその曲に合った自由な構成で曲が作られている場合が多い。その内容も、深刻なものも多く、終り方も、何の解決も見ないまま、後に思いを多く残すのである。〈善知鳥〉は、その典型的な作法を示していると言えよう。

先の如き古い時代のなごりをも色濃く持った、世阿弥の能の特質は、禅竹時代の能から逆照射して眺めてみて、はじめて明らかにできるものであるかもしれない。

（目白学園女子短期大学専任講師）